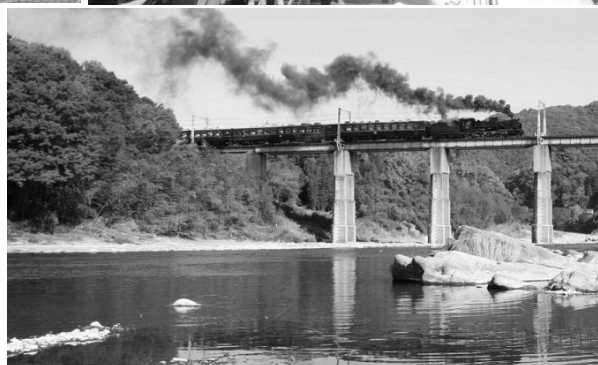
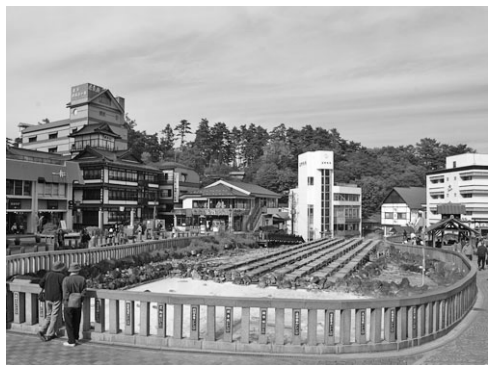




日本分析化学会

関東支部ニュース



支部長巻頭言			
「第3回東京セミナー」を開催します			
関東支部長 星薬科大学薬学部	中澤 裕之	2
関東支部活動報告			
第8回環境分析基礎講座 –化学分析実習コース–			
東京理科大学工学部	田中 龍彦	3
株式会社太平洋コンサルタント	丸田 俊久	3
JFEスチール(株)	花田 一利	4
昭和大学薬学部	荒川 秀俊	5
第29回 東北・関東支部分析化学若手交流会			
茨城大学理学部	大橋 朗	6
お知らせ			
第3回 東京セミナーのお知らせ		7
コラム			
革新をもたらすローテクの魅力			
東京工業大学大学院理工学研究科	長谷川 健	8
随想			
お茶に感謝			
創価大学工学部	新津 隆士	9
編集後記		10
第68回分析化学討論会のお知らせ		11

「第3回東京セミナー」を開催します

前職の厚生省・国立公衆衛生院から星薬科大学に移って今年で11年目を迎えました。「光陰矢の如し」でアタマの白いモノが大学人としての悪戦苦闘の11年を物語っています。日本分析化学会の会員歴もそれなりの年数になりますが、前職は食品や環境衛生行政の仕事が多く、研究成果を衛生関係の学会に発表してきました。日本分析化学会では「ぶんせき」、「分析化学」の編集委員をさせて頂き、多くの先生方と面識を持つことができましたが、年会や討論会に参加する機会はほとんどありませんでした。

大学人になって薬品分析化学講座を主宰することになって、分析化学会の年会、討論会にも積極的に学生を参加させて発表の機会を与えてきました。気がつけば、関東支部の役員になって、昨年に関東支部創立50周年記念事業では記念誌の編集委員長を仰せつかりました。西川 隆先生、田中美穂先生、肥田祐子先生、事務局の田中久光氏に支えて頂きともかく記念式典で参加者に記念誌をお渡しすることができました。3月から支部長という大役を仰せつかりました。

関東支部の活動状況については支部ニュースで詳しくご紹介されると思いますが、第47回機器分析講習会の3コース及び環境分析基礎講座・「化学分析実習(入門)コース」は田中龍彦先生を実行委員長に開催され、成功裡に終了しました。いずれも御世話頂いた先生方の献身的なご尽力によるもので全国各地からの参加者が多いのも納得致します。第29回分析化学若手交流会は東北支部との共催で東京薬科大学 小谷 明先生の御世話で6月はじめに高尾で行なわれ、分析化学会を担う若手100名の参加には勇気づけられました。地区活動として第20回新潟地区部会発表会が9月8日に、第3回茨城地区分析技術交流会が12月1日に開催される予定です。また、今年は10年ぶりに第3回東京セミナーを12月15日、星薬科大学で開催する予定にしています。第68回分析化学討論会が明年5月19日～20日、宇都宮大学・峰キャンパスで開催される予定で、深見元弘先生を実行委員長として準備が進められています。

団塊世代のサラリーマンが2007年～2010年にかけて定年を迎えます。その数、ざっと300万人と言われ、ある証券会社は退職金総額が約81兆円と試算し、熱い視線を向けており、金融業界にとっては60年待ち続けた千載一遇のビジネスチャンスと期待しているようですが、学会にとっては少子化の影響同様、会員拡充は厳しい状況になっていると言わざるを得ません。2002年から5年間の本支部会員数の推移をみると、約2930名から約2740名に減少しています。その会員拡充の呼び水に東京セミナーを企画して欲しいと事務局から要請され、第2回東京セミナーはどんな内容で実施したのかと調べて貰いました。「医薬品の分析バリデーション」と題して企画され、私も講演者の一人でした。まさか10年後に第3回を企画することになろうとは……何というご縁でしょう！ この時もそれなりに盛況(252名)であったようですが、今回は農薬等にポジティブリスト制度が導入されて賑やかになっている世界をターゲットにしてみました。厚生労働省の委員会で御世話になっている担当官も快く講演を引き受けてくれました。会場は300名収容可能な部屋を確保していますが、多くの方々の参加を御願ひする次第です。今後も関東支部会員各位のお力添えを得て本支部の活動を益々高めて参りたいと考えております。浅学非才の身ですが、ご支援のほど宜しくお願い致します。



関東支部長
星薬科大学薬学部
中澤 裕之

平成18年9月6日(水)～8日(金)、東京理科大学神楽坂キャンパスにおいて標記講習会を開催しました。プログラムは、1. オリエンテーション、2. 分析に使用される計量機器、器具の取扱い、3. 化学分析の基本操作、4. 実習：機器、器具の取扱いと試薬溶液の調製、5. 分析の質の保証、6. 環境試料(水試料)の取扱い、7. 環境試料(土壌試料)の前処理方法、8. 実習：キレート滴定による定量分析実験、9. 分析データの取扱い、10. 実習：試料の前処理及び分析方法からなり、環境分析等に不可欠な化学分析の基礎を、実習を通して習得していただくための講習会です。

受講対象は分析初級者ですが、いくらか経験はあるが基礎から化学分析を学び直したい方など全国から総勢49名が参加され、6班に分かれて実習が行われました。第1日目は班員打ち解けることなく黙々と課題実技に取り組んでいましたが、その日の夕刻に技術交流懇親会を開催したせいか第2日目以降はお互いに連携よく助け合いながら和やかに実習が進みました。第3日目は希望する実習コース、①環境試料(水)②環境試料(土壌)、③有機物試料(プラスチック)に分かれ、実試料を用いて実技を行いました。昨年までは筆記試験の結果のみで修了合格者を



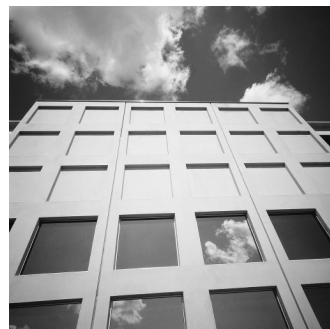
決定していましたが、今回は実技と測定結果も評価することを講習会初日ガイダンスにアナウンスしたこともあり、皆真剣に実習に取り組んでいました。本講習会の実習を優秀な成績で習得された方々には、分析化学の基礎を修得したと認定し修了証を授与いたしました。分析化学の技能伝承に、本講習会が多少でもお役に立っているものと確信しております。

東京理科大学工学部 田中龍彦

第8回環境分析基礎講座 — 化学分析実習コース —

企業におかれては、分析技術の重要性が再認識されながらも、その技術を伝承できる技術者が新任者への十分な教育時間が取れない等、企業の存続を揺るがすゆゆしき問題が常駐化しつつあります。

今回、講師・インストラクターは本講座にあたり事前に勉強会を実施いたしました。専任された講師、インストラクターはその道の「プロ」ではありますが、分析技術は奥が深く難しい面があります。個人(会社)の常識が世の中の常識とは異なる場合があります。したがって、研修・指導内容(ポイント)の統一した見解を指針として、その上で受講者にばらつきのない指導ができることを最重点課題として実施しました。講習者は分析初級者(実務経験2年未満)を対象としておりますが、実務経験5年以上の方も2割程参加いただいております。3日間に及ぶ実技、講義により、学校ではなかなか学べない事柄、あるいは教科書には書かれていない内容を、習得していただいたものと思っております。実際、受講された方は皆さん、3日間にわたって真剣にかつ積極的に臨まれ、充実した時間を過ごせたものと思います。



株式会社太平洋コンサルタント 丸田 俊久

第1コース： ICP発光分析および ICP質量分析の基礎と実際

標記講習会は、平成18年6月22日（木）、23日（金）にエスアイアイ・ナノテクノロジー（株）（東京都中央区新富）殿のラボルームで行われた。受講生は20代から50代までの幅広い年齢層で計38名の方が参加された。本講習会では、各先生方の講義を受講していただくとともに、受講生が実際に数種の試料について分析機器を用いて測定（前処理技術の習得も含む）を体得できるよう企画された。

初日は（1）ICP発光分析法およびICP質量分析法の測定原理と最近の動向：上本道久氏（都立産業技術研究センター），（2）半導体，セラミックスの分析：岡田 章氏（㈱テルム），（3）高純度試薬の分析：井上達也氏（関東化学㈱），（4）食品の分析：進藤久美子氏（食品総合研究所），（5）河川水、底質の分析：稲垣和三氏（産業技術総合研究所），（6）廃棄物の分析：貴田晶子氏（国立環境研究所）の各講義が行なわれた。

二日目は効率的に習得していただく目的で、受講生を3グループに分け、以下の実習を行った。

（1）ICP発光分析装置（マルチ，半導体検出器）を用いた環境試料分析の実際：貴田氏，（2）ICP発光分析装置（シーケンシャル）を用いた河川水分析の実際：稲垣氏，（3）ICP質量分析装置を用いた高純度試料分析の実際：井上氏，岡田氏
 一日目の講習後に行なわれた懇親会では、約半数の方が参加されました。懇親会はアルコールも手伝ってか、多くの講師や他の受講生との意見・情報交換が活発になされたことに加え、翌日の実習も和やかに進めることができ、大変意義深いものとなりました。講習会後のアンケートでは、受講生の7割超の方が各人の目的を「達成できた」と回答しており、特に実習については約9割の方が「満足」と回答していただけたことで、「実際に分析機器を用いて体得する」という本講習会の意義は達成できたものと感じています。一方で約3割の受講生は講義内容について「難しい」部分を感じていたようであり、もう少し原理・基礎に重点をおいた講義も組み込むべきであったと反省しております。今後、アンケートの回答を精査し、多くの受講生に満足していただけるような講習会を企画していきたいと思っています。

最後になりましたが、本講習会では会場を提供していただいたエスアイアイ・ナノテクノロジー（株）殿をはじめ、多くの方々にご尽力・ご協力を賜りました事を改めてお礼申し上げます。



JFEスチール（株） 花田一利



第3コース：GC/MS, LC/MSの基礎と実際
—残留農薬の分析を中心として—

標記講習会は、平成18年7月27日（木）、28日（金）に（株）島津製作所の東京カスタマーサポートセンターで行われた。受講生は20代から50代までの年齢層で、内講義のみが4名、計32名の参加者であった。講習会は、一日目が5件の講義、2日目は3つの項目の実習で行った。講義では(1) 質量分析の基礎と新展開（星薬科大学）齊藤貢一氏、(2) LC、LC/MSの基礎（埼玉県衛生研究所）堀江正一氏、(3) 農薬等のポジティブリスト制と試験法の概略、（国立衛生試験所）米谷民夫氏、(4) 農薬の作物残留分析法と実際（残留農薬研究所）小田中芳次氏、(5) 分析の信頼性（日本食品分析センター）中村宗知氏により、昼食を挟んで各1時間の講義が行われた。最後に講義に対する全体的な質疑と翌日の実習方法について説明を行い、その後講師を交えての情報懇談会を行った。懇談会には多くの方が参加し、活発で和やかな情報交換が行われた。二日目の実習では、受講生を三つのグループに分け、(1) 反応クロマトグラフィー～ポストカラム蛍光誘導体化HPLCによるN-メチルカルバメート系農薬の分析～（星薬科大学）齊藤貢一氏、(2) GC/MSによる農薬の分析（化学物質評価研究機構）田嶋晴彦氏、(3) LC/MSによる農薬の分析実習（化学物質評価研究機構）和田丈晴氏の3項目のテーマを各2時間ずつのローテーションで行った。実習後のアンケートでは、参加者の大部分が企業からの方で、その多くは環境分析などで活躍されており、すでにMSの使用経験がある方であった。講義の内容に関しては4割の方が「難しい」と感じ、6割の方が「ちょうど良い」との感想であった。個々の意見としては、「基礎的な内容をより時間をかけてほしい」との要望が多かった。実習に関しては、9割の方が、時間、内容とも「満足できた」との感想であった。最後に、実習内容の検討から会場の提供まで、お世話をいただいた（株）島津製作所の東京カスタマーサポートセンターの皆さんにこの場をおかりして心より感謝申し上げます。



昭和大 荒川秀俊

第29回 東北・関東支部 分析化学若手交流会

2006年6月8日（木）・9日（金）にわたって標記交流会が、東京薬科大学薬学部小谷明氏の取りまとめのもと高尾の森わくわくビレッジ（東京都八王子市）で開催された。例年、6月後半もしくは7月前半に開催されていたが、今回は6月前半に1泊2日で行う日程となった。開催日程の都合上、申し込み締め切り時期が4月上旬となったため、4月から新しく配属された4年生の参加数の減少が心配されたが、例年通り多くの4年生の参加があり、それぞれの研究室の学生がこの会を楽しみにしているのだと感じた。最終的には一般20名、学生78名、のべ98名のほぼ予定通りの参加者をもって開催された。今回は、初の試みとしてワークショップ形式の交流会が行われた。交流会の前にあらかじめ13名のチューターの方にはスモールディスカッション用のテーマをあげてもらい、参加者全員に希望するいずれかのテーマに所属してもらった。

交流会初日は、実行委員長の小谷明氏による開会の挨拶のあと、関東支部支部長の中澤裕之先生（星薬大薬）に挨拶を頂き、その後、ワークショップ・チューターによるテーマの紹介が行われた。ディスカッションテーマのタイトルをすべて記述すると長文になってしまうため割愛するが、分析化学の基礎的な問題から、薬学や環境分析の現場における問題、マイクロチップやレーザーを用いた最先端の分析技術などバラエティーに富んだディスカッションテーマが用意された。チューターの方々には、与えられた15分では物足りないといった感じで、各々のテーマについて熱心に説明していただいた。チューターによる説明終了後、7~8人からなるグループに別れ、各部屋でディスカッションを



行った。ディスカッションでは、学生主導で進めていくよう方針が決められていたが、私のグループでは、テーマ設定が幅広く抽象的であったため、チューターである私がディスカッションの要点を絞るための説明を再びする必要があった。限られた時間でディスカッションを行うためには、もう少し要点を絞ったテーマ設定が必要であったと反省している。しかしながら要点が定まった後は、学生間で非常に活発な

ディスカッションが行われ、ディスカッションのために用意された時間があっという間に過ぎてしまった。

ディスカッションが一区切り付いたグループから、夕食をとり、その後、夜の部のポスター発表を行った。ポスター発表会場にはビールとおつまみが用意され、参加者は、ビール片手にポスターの説明を聞いたり、他大学の参加者と会話したりしながら、学会とは違った雰囲気のポスター発表を楽しんでいるように思われた。ポスター発表ではポスター賞の投票も行われ、36件の発表のうち、青田新氏（東大院工）、工藤祐生氏（首都大学東京都市環境）、小市孔大氏（日大生産工）、鈴木展子氏（日大生産工）、永妻千佳氏（東理大理）の5名がポスター賞に選ばれた。ポスター発表終了後は、翌日のプレゼンテーション準備のため各グループ夜遅くまでディスカッションを行っていた。

2日目は、グループごとに前日に行ったディスカッションの内容の発表を行った。各グループよくまとめられたプレゼンテーションを行っており、それぞれ充実したディスカッションが行えていたことをうかがわせた。また、プレゼンテーションでは、前日のチューター講演の際にほとんど無かった学生からの質問が多くあった。本来、若手交流会は、学生が中心となって活動していくべきだと思っている私にとって非常に喜ばしいことであった。なお、最も印象的なプレゼンテーションを行ったグループとして、水口仁志氏（山形大工）のグループが選ばれた。ポスター賞とプレゼンテーション賞の授賞式の後、小谷氏の閉会の挨拶を持って、無事若手交流会を終えることができた。

今回の交流会は初のワークショップ形式ということもあり、どのような会になるのか若干の不安を持って参加したが、非常に楽しく充実した交流会であった。受身になりがちな講演会形式と違い、ワークショップ形式では、学生がディスカッションやプレゼンテーションで積極的に活動する姿を見ることができたし、私も他大学の学生と話す機会を多く持つことができた。学生にとって他大学の学生と一つのテーマに関して2日間じっくりと話し合い、プレゼンテーションとして纏め上げた経験はきっと今後の研究にも役立つことと思う。ただ、1泊2日であったため致し方ないが、スケジュールが忙しく、もう少しディスカッションのための時間があればよ



りよいプレゼンテーションができたように感じた。次回以降、ワークショップ形式が取られるかは未定だが、今回の活動は今後の若手交流会を行う際に大変参考になると思う。なお次回の若手交流会は、私の取りまとめで2007年6月28日(木)・29日(金)につくばグランドホテル(つくば市)で開催されることが決まっている。皆さんの積極的な参加を期待しています。

最後に本交流会を取りまとめていただいた小谷明氏をはじめとする東京薬科大学楠研究室の方々に心から感謝いたします。

茨城大学理学部 大橋 朗



第3回 東京セミナー開催のお知らせ

主催 日本分析化学会 関東支部

2006年5月末に食品中の残留農薬、残留動物用医薬品の分析にポジティブリスト制度が導入されました。本制度の施行に伴う食品中の残留農薬、動物用医薬品の現状と残留分析の最新情報をご紹介します。

期日 平成18年12月15日(金) 13時~17時

会場 星薬科大学 新館〔東京都品川区荏原2-4-41、電話 03-5498-5763〕

交通：東急池上線「戸越銀座」駅下車、徒歩5分

テーマ「ポジティブリスト制度の施行と残留分析の現状」

1. はじめに一食品の残留分析とポジティブリスト制度(星薬大) 中澤裕之
2. 施行された残留農薬等のポジティブリスト制度(厚労省) 宮川昭二
3. ポジティブリスト農薬分析の最前線
—分析者はどのように対応しているか— (化評研) 田嶋晴彦
4. 残留動物用医薬品分析法の現状と課題(埼玉衛研) 堀江正一
5. 農薬の残留分析法と実際(残農研) 小田中芳次
6. 残留分析の信頼性確保(日食分析セ) 中村宗知

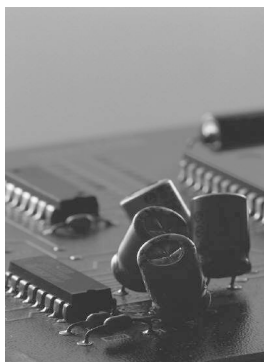
定員 250名

参加費 1000円

申込方法 参加希望者は氏名、勤務先、住所、電話番号、電子メールを明記の上、はがき、FAX、電子メールで下記にお送り下さい。

申込先 〒141-0031 東京都品川区西五反田1-26-2 五反田サンハイツ304号
日本分析化学会関東支部〔電話：03-3490-3351, FAX 03-3490-3572、
E-mail:hm_tanaka@jsac.or.jp〕

私が分析化学という分野と、そこで活躍する人に魅力を感じて分析化学会に顔を出すようになって、10年が経過した。分析化学は、測れないものを測れるようにするという、分析手法の開発を標榜する総合科学分野だが、時代の最先端を行くようなハイテクを必要とする場合と、驚くほど簡単なローテクが新しい



分析世界を拓く場合があって面白い。

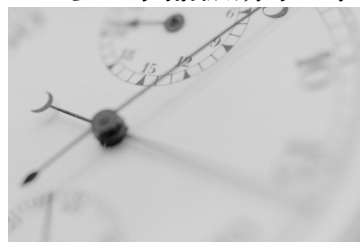
半導体技術の革新が最も鮮烈だった1970年代を小学生時代として過ごしたため、ハイテクの発展振りには目を見張る思いで将来に思いをはせて育った。その頃、当時としても旧式の母譲りの真空管式電蓄で、レコードや短波放送を聞きながら「いつかレコードやテレビ・ラジオ放送がすべてデジタル化する日が、自分の生きているうちに本当に来るのだろうか」などと思っていたら、あっさり実現され、正直拍子抜けしてしまった。面白くないほど技術発展が早いと感じた。気がついた

ら身の回りはすっかりハイテク化され、身に着けている時計や手帳までがデジタル化し、往時の予想をはるかに超えた便利さをありがたく使っている。

ところで、研究というのはハイテクだけが面白いわけではない。こんな時代でも画期的なローテクが湧き出てきてわくわくさせられることがある。この10年眺めてきた日本の分析化学領域で最大の話は、おそらく島津製作所の田中耕一氏がノーベル賞を受賞されたことだったろう。この人はいろいろな点で話題をさらったが、分析化学にわずかなりとも関わる私にとって一番印象的だったのは、アイデアが革新的なローテクだったことである。田中氏の講演には幕張とニューオーリンズで日本語と英語で二回接したが、島津の質量分析装置開発チームが少数精鋭で、一人ひとりが大変なハイテクを自在に操れる不抜の技術者である点にまず驚かされ、次いでその高い技術力に革新的ブレークスルーをもたらしたのが、田中氏の新しいコンセプトを伴ったローテクであることが浮かび上がり、光っていた。

私は幼少期を手回し蓄音機や真空管式テレビなどの、今から思うとびっくりするほど旧時代のアナログ文化に囲まれて育ちながら、中学生以降は水晶時計やポケットPCなどの新時代のデジタル文化受け入れて成長し、幸いにも新旧両時代の良い点を肌で覚えることができた。比較してみると、旧時代製品といえども、機械・電気文化を軸としたその時代なりのハイテク製品であったことには変わりなく、新時代はそれが電子化されただけで、本質や概念はあまり変わっていないことに気づく。たとえば、今も私の傍らで活躍している柱時計の振り子は、等時性の原理の象徴で、それがデジタル化されてからは水晶振動子に置き換わったものの、基本概念は何も変わっていない。

つまり、本当に革新的な思想的発展は、最初に振り子という装置を考えたときにあったといえる。デジタル時代の本当の革新は、世界規模での高品質通信の自由化にあるのかもしれない。これだけは旧時代には全く叶わなかった、歴史的な技術の転換点と感じられる。



このように、歴史的な転換点となりうる技術には、テクニックやスキルではなく、新しいコンセプトがそのまま技術になっている場合が多い。田中氏の例もその典型だし、安価なスピーカーを使ったメスバウアー分光、熱電対とアンプ無しの回路で組み上げた初期の赤外分光器なども、分析科学者の気概を感じて感銘深い。ハイテクを利用した例としては、STMにも表面顕微鏡の原理的概念を一変させたコンセプトの革新がある。いずれも面白いが、大してお金をかけずに真に新しい技術を生み出した研究には最高の憧れを感じる。ともあれ、どうしても測りたいという気持ちから生まれた新しい分析手法で、世界で初めての測定結果を得たときの感激を味わいたくて、はらはらしながら過ごすのが楽しい分析化学者の生活であろう。いい世界に迷い込んだと思っている。

お茶に感謝

創価大学工学部環境共生工学科

新津隆士

私にとって緑茶を飲むことは子供の頃から当たり前のこととなっていたが、ご飯の合間を縫って食卓にパンが顔を出すようになり、紅茶も飲むようになった。初めは砂糖とミルクを沢山入れて飲むのが当たり前であった。またいつの頃かインスタントコーヒーやココアも飲むようになった。ただその頃は何か目的を持って飲むことはなかった。

10年前になると健康志向が強まり、お茶について色々な研究も始まり、お茶の本も出始めていた。ちょうどその頃、少人数講義を担当することにして他の大学にも無いようなテーマを考えていたので、書店でお茶の本を見つけて、それを教科書として輪講形式で講義をすることとした。いざお茶について調べてみると今まで飲んでいたお茶が、いかに有り難いものであったかが良くわかった。寿司と一緒に緑茶を飲めば、殺菌作用により食中毒予防となるし、緑茶を飲むと胃ガンになりにくくなるのはピロリ菌の抹殺ができるからとわかったときは感動した。またカツ定



寿司屋で出される『上がり』は『これで終わり』という意味の花柳界の隠語から。一般のお茶より温度が高く、魚の油脂分を洗い流す働きを持つ。番茶などの粉茶が多い。フラボノイドの働きで消臭効果もある。

食にはオレンジやレモンの輪切りが付いてくるのが納得できずいつもつまみ出していたが、肉と野菜だけ食べているとアミンと亜硝酸との反応で強力な発ガン物質ニトロソアミンが生成することを知り、

ビタミンCがその生成を阻止することがわかり、先人の知恵の深さに感謝して必ず食べるようになった。柑橘類が無くても緑茶（唯一ビタミンCを含む）を飲んでおけば大丈夫と知って納得してしまった。一般にお茶には発酵方法と発酵度の違いとにより、緑茶→白茶→青茶→紅茶の系列と、緑茶→黄茶→黒茶の系列があることがわかってから、色々な場所に出かけるたびにお茶に目がとまるようになった。緑茶・紅茶・青茶・黒茶・白茶までは購入し飲むことができたが、残念なことに黄茶だけは未だに入手できていない。今では守備範囲はコーヒー、ハーブティー、健康茶まで広がり、これまで200種以上のものを飲むことで、歴史と奥深さを感じた。中には健康には良いが、味はお勧めできないものにも色々出会った。ハーブティーではアーティチョーク、健康茶ではセンブリ茶、菊花茶が凄い味でインパクトが強かった。コーヒーが肝臓に良いことや、紅茶によるうがいがインフルエンザ予防に良いことなど、身近にある飲み物が実はかなり効能があったことに驚き、有り難さを感じる。

また中国と日本でお茶の楽しみ方に違いがあると言われている。中国では香り高いお茶が重視され何度淹れても良い香りがするお茶が好まれている。一方日本では玉露・抹茶に代表される味（特にテアミンによる旨味）が重視され、覆いがされ育てられた柔らかい新芽で作ったお茶が好まれている。中国の方は玉露や抹茶を特に美味しく感じておられないようである。

【緑茶】不発酵茶。釜炒りしたり蒸したりすることで発酵を止める。

【白茶】微発酵茶。茶葉を自然発酵させ、火を炒れて発酵を止める。白い産毛のある茶葉を用い白っぽく見えるため、その名が付いた。

【青茶】半発酵茶。烏龍茶はこの一種。お茶の中でも花のような特有の香りを持つ。

【紅茶】完全発酵茶。西洋のイメージが強いがもともとは中国茶のひとつ。

【黄茶】微後発酵茶。緑茶と同様に発酵を止めた後、高温多湿下で再びゆっくり発酵させる。生産量が少なく、希少価値が高い。皇帝が愛した茶として有名。

【黒茶】後発酵茶。茶葉の自然発酵ではなく、微生物による作用。プーアル茶がこの代表。長期間置くことで熟成が進むので、古いものほど高価。

ところでブレンドという言葉は供給者側と消費者側で目的が違っていることにお気づきであろうか。供給者側からすると味や香りの弱い商品価値が低く大量にある種類に、味も香りも良い種類（例えばコーヒーにおけるブルーマウンテン、紅茶ではダージリンなど）をブレンドすることにより、商品価値がかなり高まり利益が得られるという利点がある。消費者側のブレンドは個人の好みを追求しオリジナルのブレンドを作ることを目的と

して行われるか、健康に良いから飲みたいが味や香りが好みに合わないときの飲みにくさの改善などを目的としてブレンドが行われてきている。前者の例は消費者が複数の種類の豆を個別に買い、好みに合わせて産地や焙煎度の異なるコーヒー豆をブレンドする場合である。後者の例ではハーブティーや健康茶を健康のためとはいえ単独で濃く淹れると吐きそうになるお茶もある。ブレンドすることで、かなり飲みやすくなるから面白い。但し、失敗すると余計ひどい状況になり、高いお茶だともったいないから捨てられず、目に涙を浮かべながら飲んだこともある方も居られるだろう。

ところでびっくりさせられるお茶としては冬虫夏草茶がまずあげられる。味は漢方薬の様で飲みやすかったが、調べてみて蛾の幼虫が菌にやられて死んでその養分で育ったキノコだとわかった時はショックであった。中国では茶の葉を食べた蛾の幼虫の出した糞を用いた虫糞茶があるそうであるが残念ながらまだ飲んだことがない。中国に行ったら是非購入したい品である。またパプアニューギニアの紅茶のティーバッグは丸く、どら焼きの様である。



さて色々話題はつきないが、気分転換、眠気覚ましだけでなく健康にも良いお茶は何と素晴らしいのだろう。ただひたすらお茶に感謝である。

編集後記

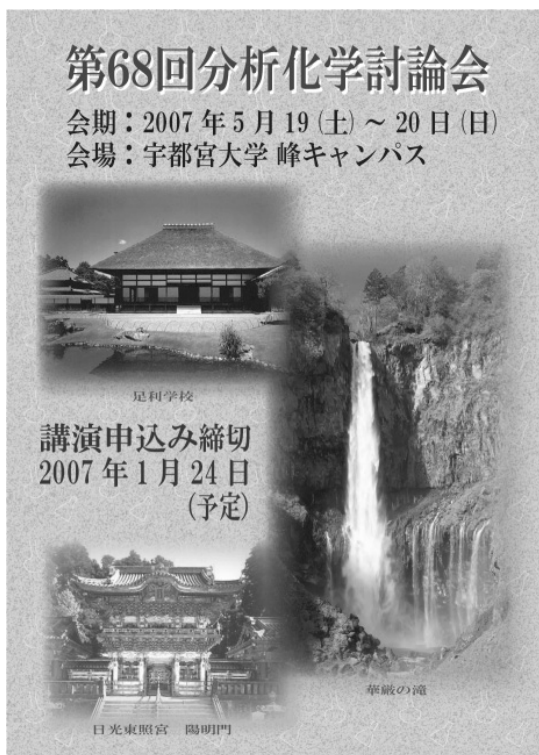
編集後記である。右も左もわからないまま引き受けたことだが、何とか最後まで漕ぎ着けることができたのは、ひとえに原稿を執筆していただいた方々のご協力あってのこと。只管感謝。

お分かりだと思うが、表紙は関東支部各都県の代表的な観光地の一つを取り上げてみた。ドライブがてら、表紙に使えるような風景を撮影したが、関東は都会というイメージに反して緑が多い。東京のイメージとは異なるので写真にはしなかったが、神宮や皇居など街中に緑を提供している場所が結構あって、少し意外に感じる。思い込みや先入観による印象は存外強固だなあと改めて感じた次第である。

すでに学会の申し込みはWeb上で済ませるようになった。支部ニュースも関東支部ホームページへと情報提供の場の軸足をシフトさせる頃合ではないだろうか。近々、ホームページもリニューアルするので、どうぞご閲覧の程。

支部ニュース担当 久保いずみ
原田 誠

第68回分析化学討論会の案内



会期

5月19日(土)・20日(日)

会場

宇都宮大学峰キャンパス〔宇都宮市峰町350、
交通：JR宇都宮駅西口バス乗場よりJRバス
祖母井，茂木，清原台団地行など，又は東野
バス 真岡，益子清原球場行駅行などに乗車
約15分「宇大前」下車〕

宇都宮大学ホームページ (交通案内)

<http://www.utsunomiya.ac.jp/map/map01.html>

発表形式

主題講演 (口頭発表)，一般講演 (口頭発表)，
一般講演 (ポスター発表)，テクノレ
ビュー講演 (ポスター発表)

討論主題

バイオイメージングの新展開

講演申込要項

講演時間 主題講演 (口頭発表) 20分 (講演15分，討論5分)
一般講演 (口頭発表) 15分 (講演12分，討論3分)
ポスター発表 90分 (コアタイム)。

口頭発表は，パワーポイントによる発表が原則。

講演申込方法

すべて，オンライン上 (下記) からの申し込みになりますので，ご注意ください。

【第68回分析化学討論会講演申込登録スケジュール】

講演申込登録開始日時：12月13日 (水) 14時

講演申込登録締切日時：1月24日 (水) 14時 (厳守)

※締切日時までは講演申込内容の修正，要旨本文入力・修正，画像アップロードが可能です。

要旨本文入力締切日時：3月7日 (水) 14時 (厳守)

第68回分析化学討論会講演申込URL

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsac/online/top.html>

ミラーサイト <http://square.umin.ac.jp/jsac/online/top.html>

実行委員会連絡先

〒323-0024 栃木県宇都宮市陽東7-1-2 宇都宮大学工学部応用化学科内 第68回分析化学討論会実行委員会事務局 上原伸夫

(電話：028-689-6166，FAX：028-689-6166)

E-mail：touron68@chem.utsunomiya-u.ac.jp

【託児所の開設について】

第68回分析化学討論会では，託児所を開設する方向で関係各所との調整ならびに準備をすすめています。詳細は，実行委員会HP

(<http://www.ab11.yamanashi.ac.jp/jsackanto/68touron/index.html>) をご覧下さい。